

学校だより

《令和7年度 全国学力・学習状況調査の結果》

令和7年9月19日特別号
京都市立向島小学校
校長 鎌田 真行



4月17日に、本校6年生を対象に実施された「全国学力・学習状況調査」について、その結果をまとめました。実施された国語・算数・理科、3教科の総合的な結果とその特徴を下の通り報告いたします。また、家庭での過ごし方や学習時間を問う調査（児童質問紙）も実施されており、生活習慣と学力との関係など、本校の子どもたちの状況をお伝えします。

《国語科》

国語科の問題は、「知識及び技能」と「思考力・判断力・表現力等」の二観点・14の設問で構成されています。

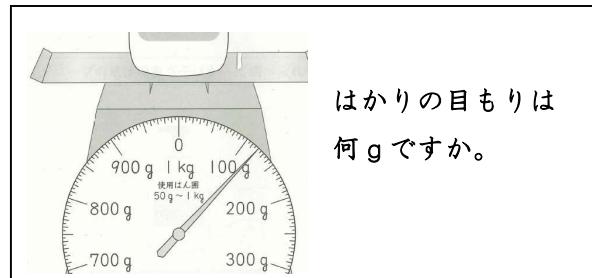
平均正答数は14問中9.1で、全国平均を若干下回る結果でした。ただ、設問ごとに見てみると、よくできている内容もあり、全国（公立）や京都府（公立）とそれほど正答率に違いはありませんでした。

そんな中で、唯一特徴的だったのは『言葉の特徴や使い方に関する事項』、いわゆる『漢字の問題』の正答率の低さです。出題された『好み（このみ）』『暑い（あつい）』は3～4年生で習う漢字であり、一般的にこのような漢字の書き取りは正答率が高まる傾向がある設問（読み・書き・計算）です。学んだことを定着させることは簡単ではありませんが、本校の児童にとっては特に大事なことだと言えそうです。

《算数科》

算数科の問題も同様の二観点・16の設問で構成されています。

平均正答数は16問中7.8となり、今回の三教科の中で最も課題が残る教科であったと言えます。その中で、国語科と同様に一般的に正答率が高まる傾向がある設問（読み・書き・計算）に対しての正答率の低さが算数科でも確認ができました。



はかりの目もりは
何gですか。



10%増量は元の何倍
ですか。

現代のテストの問題はとても複雑です。図やグラフを見ながら、数字や違いを読み取ったり計算をしたりする問題が増えてきました。まずは、上記のような『知っている』や『覚えている』で正答できる設問を解決できる力を身につける必要があります。

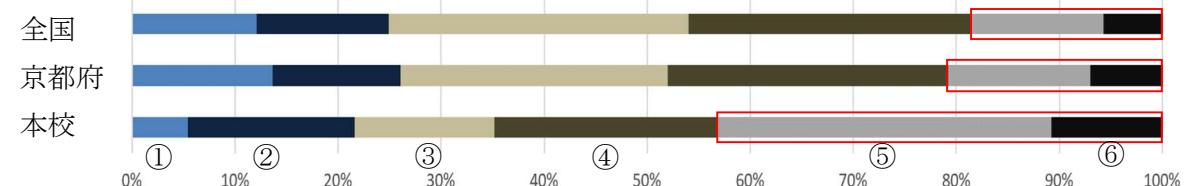
《理科》

理科の問題も同様の二観点・17の設問で構成されています。

平均正答数は17問中9.8で、こちらは全国平均を若干上回る結果となりました。『エネルギー・粒子・生命・地球』を柱とする領域からの出題でしたが、概ね領域による出来・不出来という見当たらなかったです。言い換えると、全体としては苦手な領域をつくらず、日々の学びの成果を発揮できていると言えます。ただ、特徴を挙げるとすると『出題形式』による違いが少なからずあります。『選択式』など記号で回答するものに比べ、『記述式』など文章で回答する設問は正答率が低かったです。これも、教科というよりも、読み・書き・計算の定着の弱さに起因するところがあるかも知れません。

《児童質問紙の結果から》

Q. 学校の授業時間以外に、普段、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（塾や家庭教師、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）

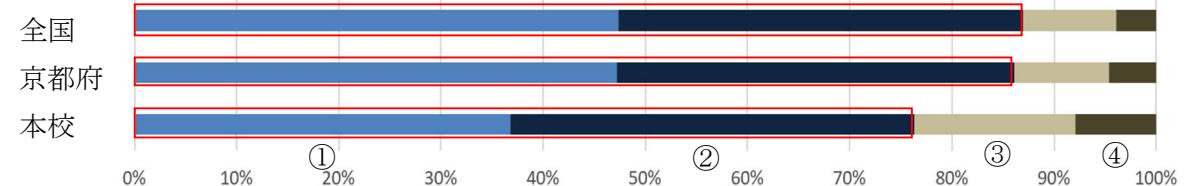


- ① 3時間以上 ② 2・3時間 ③ 1・2時間 ④ 30分・1時間
⑤ 30分より少ない ⑥ 全くしない

児童質問紙の中から、特徴のある質問結果を紹介します。まずは、上記の質問です。

『全国』『京都府』と比較すると、本校の⑤⑥の多さが目立ちます。長い時間取り組めばいいという訳ではありませんが、⑤「30分より少ない」が本校では最も多いという点が気になります。

Q. 自分には、よいところがあると思いますか



- ① 当てはまる ② どちらかといえば当てはまる
③ どちらかといえば当てはまらない ④ 当てはまらない

次は、「自分には、よいところがあるか」という自己肯定感についての質問です。こちらも『全国』『京都府』と比較すると肯定的な回答が若干低いことが分かります。

小学生にとって、自己肯定感はありとあらゆる力の源です。『学習』『友達関係』『遊び』等々、自己肯定感を育むことで自らの生活をよりよくし、学ぶ意欲を高めることができます。

自己肯定感は自分一人で高めることはできません。周りから認められること、まずは身の周りの我々大人が、子どもたちをしっかりと認めることが大事だと改めて感じる質問回答です。



《全体を通して本校の成果と課題》

どの教科においても子どもたちの頑張りがよく出ていたと思います。誰でも得意・不得意がありますので、必ずしも『平均』と同じである必要はありません。ですが、まだまだ力を伸ばすことができそうな伸び代を子どもたちからは感じられます。学校と家庭とが連携し、子どもたちの『がんばろう！』を支えていければと思います。今後ともよろしくお願ひいたします。